

2004オープンキャンパス企画

公開ゼミナール「地域から現代社会を考える」 現代社会学科：山田ゼミ

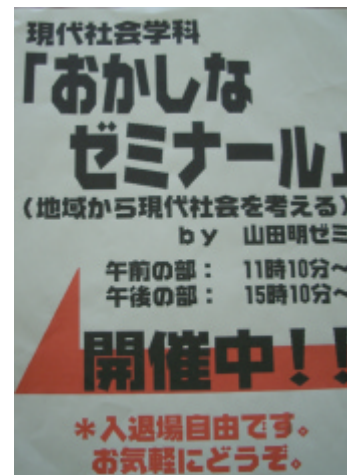
昨年につづいて、オープンキャンパス企画で公開ゼミナールを行うことになった。オープンキャンパスを盛り上げようと「ハッパ」をかけたこともあり、1年で公開ゼミを閉じるわけにもいかず、再度の「挑戦」となった。テーマは昨年と同じく「地域から現代社会を考える」として、ぶっつけ本番に近い形で実施することになる。どうなるやら心配ではあるが、いつものゼミの雰囲気が出せたらと思う。写真は卒業した柳生君が作成してくれた昨年の「案内」だが、今年も使わせてもらうことにしよう。

さて「地域から現代社会を考える」というテーマは、私が教養のテーマ科目で担当した講義名であり、岐阜高校の出前講義のタイトルでもある。グローバル化のもとで揺れ動く現代社会について、足もとの地域から問題にアプローチすると

いう趣旨だ。より具体的には私たちが暮らす地域の経済や生活、環境などに関心を持ち、そこから現代社会が抱える諸問題を分析し、その解決策をさぐっていくことだ。私が学部で担当している現代都市問題や地域政策論、そして地方財政論などは、こうした趣旨で講義しているつもりだ。社会調査実習においても、商店街や市町村合併を素材にして、ヒアリングやアンケート調査から現代日本の地域問題にアプローチしている。

いま名古屋は「元気」だと言われている。新空港の開港や万博の開催をひかえて、開発ブームが続いている。名古屋駅前や栄、金山などの都心部で再開発が進み、一見すると華やかで活気に溢れている感じだ。大須商店街や私の家の近くの「星ヶ丘テラス」などは、若い人たちで一杯である。その一方で、名古屋周辺の都市で再開発が行き詰ったり、大型店の撤退などが話題になったりする。名古屋市内でも下町と言われる商店街の多くが停滞を続けたり、都心部との格差がますます広がっている。一昨年の調査実習でとりあげた円頓寺、今年の調査対象である滝子などは、その典型であろう。

とかく華やかな地域だけがクローズアップされがちだが、足もとの商店街や地域にも目を向ける必要があるのではなかろうか。これから本格的な高齢社会を迎えるなかで、一点豪華な「拠点開発」よりも、身近な商店街の活性化や地道なまちづくりの方が大切なのではないか。マイカー依存の郊外型「巨大ショッピングセンター」にも、持続可能な都市・まちづくりという視点から問題を考えていく必要があるろう。



(7月26日 記)